

第15号 華山会報

平成17年10月11日
財団法人華山会

これからの華山研究の課題

ロンビア大学名誉教授 ドナルド・キーン



戦後、渡辺華山の研究が非常に発展したのは言うまでもない。『渡辺華山集』の七巻がそれを示す例である。しかし明治時代に出来た全く全集らしくない『華山全集』以来全集は、いまだ日の目を見ていない。『定本渡辺華山』という大きな三冊の本は大変美しいが、華山の手紙や文章は少なく、主要な絵のすべてが収められてはいない。もっとも華山の作品は極めて多く、全部を網羅することは確かに困難である。だが、たとえでも、華山の芸術を代表する肖像画のすべてを一冊の本にまとめることは不可能ではない筈である。そういう本がいつ現われるだろうか。

アメリカの日本美術の研究者による近世の画家を論じる大きな本には渡辺華山の肖像画は五つしかないと言われている。私はこの一節に接して大に驚いた。もともと筆者は華山の専門家ではないし、外国では日本の展覧会の目録は容易には入手できないために、以前からあった日本近世美術史に載っている挿絵に頼ったのだろう。そして、そこに掲載された佐藤一斎、鷹見泉石、市河米庵、お竹、五郎の計五点を渡辺華山の肖像画の全てと考えたとしても不思議はない。

しかし、華山についてのかかなり専門的な書物にも重要な肖像画が抜け落ちているのである。華山にとって世の中で一番大切な人物が母親であったのは明白であり、実際、母親の肖像画を再三描いたらしいが、現存しているものは一点しかない。それなのに、この絵が華山の研究の中で取り上げられることがない。今年になって、田原市博物館から発行された目録に、ようやくカラー写真が初めて掲載されたが、これまではモノクロでも一回しか掲載されなかったと思う。この絵が取るに足らない駄作と思われたのか、あるいは贋作と懸念されたのか、今まで掲載されなかったものである。弟子たちが描いた華山の肖像画も全部見たいと思う。いつも華山に関する書物の表紙や扉絵を飾る椿山の手による肖像画が外にもかなりの数の作品があるのではないだろうか。二、三年前にホルルルの美術館を訪ねた際、華山の肖像が壁にかけられていた。そこには椿山の名前も付も示されていたが、はっきり言って、いつも肖像画にたまたま気品が見い出せなかった。もっと元氣のある時に描かれていたなら違っていたらどうか。あるいは贋作なのか、華山に関心のある人なら、この肖像画に秘められた逸話にもきくと興味を抱くであろう。

華山の肖像画について、もう一つの興味がある。私が知りたいのは佐藤一斎の肖像画を描いた段階で、華山自身が特定の画家または学派から影響を受けていたか、あるいは研究対象としていたかということである。オランダの書物に見られる偉人の銅版画も見た筈だが、そこには何らの影響も感じられない。華山の狙いは一斎の身分の高さを示すのではなく、彼の人間味を引き出すことにあると思う。

華山は川原慶賀が描いた出島の絵を知っていたらどうし、肖像画に出ているオランダ人にも個性を感じたであろうか。私には、これら疑問に答える術を持たない。しかし、華山の肖像画には、日本人の個性の探求に大きな意義があると思う。たとえば、華山が同じ人物の肖像画を十一回も描いたのは、何らかの真実を求めていたとしか考えられないからである。佐藤一斎の人間性を何とか引き出そうと、優しい顔や意を決した顔やグリーモアのある顔や儒者らしい顔などを次から次へと描き続けた。

私個人の意見だが、山を描くにしても、中国の絵によく見られるような名もなく特徴もない山に魅力を感じず、見た人が「この山だ」と思わせる絵にこそ惹き込まれた。まして人間の肖像画ともなれば、目に見えるはっきりとした個性が託されていなければならなかった。渡辺華山の肖像画が画期的な作品であったと人々が気づき、今後の研究が盛んになることを期待している。



池ノ原公園

「華山に学ぶ初めの一步」

愛知県立渥美農業高等学校校長
細井直樹

私にとって三河湾に浮かぶ蔵王山は遠くにかすむ対岸の山でありましたが、今春の異動により、三ヶ根山東麓の地より渥美農業高校まで通勤することになりました。

朝、田原の街が近づくと、東から蔵王、衣笠、滝頭、そして学校の後にある藤尾山へたおやかな峰々が並び、加治まで来れば暖帯林特有の濃い緑をまとった美しい山肌が目前に迫り、なぜか心がわくわくしてきます。主として地理を教え、三十年以上も日本各地の山を登ってきた私にとって、田原の魅力はやはり山のある景観でありました。

渥美半島はこの十月より全域が田原市となりましたが、その温暖な気候と勤勉で人情の厚い土地柄は、豊川用水の通水と相俟ってこの地を豊かな農業地帯にしました。さらに付け加えさせてもらえるのであれば、渥美農高の存在もそうした発展に多少の貢献をしたのかもかもしれません。ともあれ渡辺華山の誉れも高き田原に勤務できることの幸せを日々感じております。

華山の足跡を追っていく中で惹かれたことの一つに、「全葉堂日録」「客参録」「参海雑志」などの挿絵入りの記録があります。これらは華山四回目の田原滞在の折、藩領の渥美半島や周囲の島々、岡崎や吉田などを巡り歩いて書かれたものです。その中で、滝頭山に登ってハイキングよろしく酒を酌み交わしながら領国を見渡すくだりがあります。続いて「加地山の峰に登り、御領の内をのぞむ。浦、吉胡のわたりより大久保、高松のわたり迄見渡さる」とあり、学校裏手の藤尾山から稲荷山への稜線を歩いた様子が目に浮かぶようです。描かれた挿絵やスケッチは、当時の景観や人々の生活のイメージを現代に伝える上で大きな役割をしており、大変興味深いものです。また華山の挿絵には、領国と民に対する優しさや、初めて見聞きするものへの限りない関心が表れており、華山が楽しそうに旅をするさまが伝わってきます。

もう一つ、農業高校にとって大切な人物があります。華山が藩の興産方として採用した大蔵永常の存在です。江戸時代の三大農学者の一人として教科書にも登場する永常は、田原で製糖、製蠟の技術などを伝えたばかりか「門

田の栄」という農業書も書いています。先日、大蔵永常の出身地である九州の大分県日田市を訪れる機会がありましたが、地元ではあまり脚光を浴びていないようでした。しかし、田原藩に貢献し、「農」に執念を燃やした人物として、華山と関連させながら生徒たちには是非語る機会を作らねばと考えています。

縁あってここ田原の地に勤め、渡辺華山にふれる機会ができました。多才な華山の数々の業績はもちろんです、特にその生き方についてはもっともつと字ばねばならないと思っております。まずは初めの一步というところで、今後皆様からいろいろとご教示いただきすようお願い致します。



目次

題字「華山会報」華山会理事

小澤耕一

これからの華山研究の課題

Donald・キーン

愛知県立渥美農業高等学校長

細井直樹

目次

画家渡辺華山の心象

『立原翠軒像稿』

『駄古小記』『駄古或問』

渡辺華山の

「自律狂歌草稿」鑑賞⑦

田原市博物館所蔵品から

『依田竹谷筆卜商像』

渡辺華山の地方確認

華山史跡

『参海雑志』にみる

伊良湖のスケッチ

財団法人華山会からのご案内

田原市博物館

画家渡辺華山の肖像

重要美術品 立原翠軒像稿

文政六年（一八二三）頃 紙本墨画淡彩
縦二九・七cm 横二七・四cm
個人蔵

立原翠軒（一七四四～一八二三）は水戸藩の儒者で、華山と同じく谷文晁門下で学んだ杏所（一七八五～一八四〇）の父です。天明六年（一七八六）小納戸役彰考館総裁となり、六十歳までの十七年間総裁を勤めました。文化九年（一八一二）からは息子杏所と共に江戸小石川に住んでいます。自らも画論『此君堂後素壇』を著し、林十江（一七七七～一八一三）を見出すなど、文政六年三月十四日に八十歳で江戸に没しました。水戸の学問・文化を中央に比肩するほど高めた偉大な学者でした。息子の杏所は、名は任、字を子遠

甚太郎（のち任太郎）と称し、東軒杏所、香案外史などと号しました。十九歳で家督を継ぎ、小姓頭にすんで禄二百五十石を給せられました。有能な藩士として烈公こと徳川斉昭（一八〇〇～一八〇六）の信任篤く、父翠軒について幼少から学を修めました。画は林十江に学んだのち谷文晁（一七六三～一八四一）に師事し、華山とは兄弟弟子となります。花鳥画、山水画ともに優れ、画風は平明で瀟洒なその高潔な人となりであらわす作品が多く、そのいっぽうで自由奔放に筆をふるった「葡萄図」（重要文化財・東京国立博物館蔵）のような作品もあります。また、篆刻、画の鑑識に長じていました。渡辺華山・



椿椿山と親しく、華山の入牢、塾居の際には、椿山とともに救援活動の中心として活躍しました。顔の輪郭を鋭い線描で一気に描き、鋭く相手を射すくめるような眼光と意志の固さを表すような口元、白髪まじりの髪には淡墨や焦墨を用い、顔のしみは臙脂をませた黛緒で点描しています。その人となりを知っていないければ、描ききれないのは明らかでしょう。無名居士著『立原

両先生』に翠軒の没年を記した後に「田原藩の渡邊登来り弔し、遺囑によつて其の肖を写す」とあります。この画の正本はかつて、杏所の娘が嫁いだ劍豪千葉周作の後裔と伝えられる千葉家にありましたが、残念ながら関東大震災で焼失してしまいました。正本は無款であり、稿の写生を重ねて正本を完成させたとしても文政六年に近い時期の作と考えられます。文展審査員としても活躍した小室翠雲（一八七四～一九四五）の旧蔵品で、箱蓋表に「渡邊華山先生立原翠軒先生」と翠雲による題が書かれています。長らく展覧会では公開される機会がありませんでしたが、今年九月から十月にかけて開催される田原市博物館特別展「渡辺華山・椿椿山が描く人物画」で展示されます。ニューヨークのメトロポリタン美術館にかつて静岡県に伝来した「立原翠軒像稿」がありますが、模成と考えられます。

田原市博物館学芸員

鈴木利昌

「駄舌小記」・「駄舌或問」 ④

研究会長 渡辺 巨祥

駄舌或問・続

〔底本は蓬左文庫〕

一 或問 「アウスタラリー」ノ内新(ニイウ)「ホルランド」ノ地新「ソイトワレス」(南華麗)ノ諸地大低大貌利太尼亞ノ領地ト成タル由其外「アルペントリア」チーメンズ、キユスト(渚)「ウイッテランド」エーントラライワランド(會宛太刺尼都国)等ノ地モ亦大貌利太尼亞ニ入り候ヤ

一 ある人問フ、「アウスタラリー」(オセアニア州)のうち、新オランダ(現在のオーストラリア)の新ソイドワレス(現在のニューサウスウェールズ州)の諸地は大抵が大フリタニアの領土となつたときいてゐる。そのほか「カルペントリヤ」(オーストラリア北部東よりの半島部)「アルペントリア」「チーメンズ、キユスト」(オーストラリア北部海岸中央の湾と岬からなる地域)、「ウイッテランド」(オーストラリア西北部海岸の地域)、「ウイッテランド」「ウイッテランド」(オーストラリア西北部海岸の地域)、「エトンドララララララ」(オーストラリア西海岸の地域)、「エトンドラララララ」(オーストラリア西海岸の地域)等々の地も亦大フリタニアの領土となつたのであるが。

「アウスタラリー」地志家近來是ヲ五世界ノ一定ニ其地北極出地三十度ヨリ南極出地五十度ニ亘ル又東西經度百二十度ヨリ百五十度ニ及フ海島ヲ合シテ是ヲ稱ス答曰 新荷蘭ハ一ノ大洲ノ如ク縱横凡千六百二十里(按スルニ此道法独逸ノ里數ナリ一里ハ我一千三百三十坪ニ当ル)方ニシテ歐羅巴ニ比スヘシヨリテ數百年ノ力ヲ積ニアラサレハ開闢セル「能ハスシテ」一國ノ力ヲ以テ統一スル「ヲ得ンヤ」大「フリタニア」罪人ヲ移シ民ヲ植テ漸ク一辺ノ地ヲ開ナリ我國モ亦罪人ヲ送リタリ

アウスタラリー(オセアニア州)を、地理学者は最近これを五大州(五世界)の一つと見ている。この地域は北緯三十度から南緯五十度におよび、又東西經度百二十度から百五十度におよんでいる。この地域の島々を合せてこれをアウスタラリー

一とよんでいる。

一 答えていふ、新オランダは一大州の如く、縱横およそ千六百二十里方もあり、(ようするにここにいふドイツ里數の一里は、我が國の一―三十坪に当たる)ヨーロッパ全州に匹敵する。従つて數百年の努力なくしては開拓をすることはできない。まして一國の力をもつて統一することなど不可能である。大フリタニアは、罪人をこの地に強制移住させて、かろうじてわずかな土地を開拓したにすぎない。我が國も亦罪人を送つたことがある。

一 或問 全球ヲ航海スルニ諸國峽海ヲ通行スヘシ其海門ヲ經過スルハ其本國ノ印鑑ナクテハ猥リニ通サザルヤ

一 答曰 文印等ヲ用ヒス其航海ノ故由ヲ記シ其官署ニ達スルノ近頃我國「ヘツスル」ト云者自然理學吟味(ナチュールレイキオントルスーケル)ノ為ニ地球ヲ航海セシカド何ノ差支モナシ唯俄羅斯領ノ内一所(按スルニ「ベスローテンランド」海門アリ是ハ「ペーテル」俄羅斯都名ノ文印ナケレハ出來サリシ

一 ある人問フ、全世界を航海する場合、他の國々の海峡を通行しなければならぬが、その本國の印鑑(通行許可証)がなければ、通行できないのであるが。
一 答えていふ、印鑑(通行許可証)等はいつて、航海の目的を書いて關係官庁に通過するのみである。最近、我が國の「ヘツスル」といふ者が、自然理學吟味(ナチュールレイキオントルスーケル)のために世界一周をしたが、何らの支障もなかつたといふことである。ただ、ロシア領内の一カ所の海峡(思つに「ベスローテンランド」といふ海峡だけは、「ペーテル」(ペテルブルク)(ロシア帝都名)の印鑑・通行許可証)がなければ通行することが出来ない。

一 或問 一地球中帝國ト稱シ候ハ

一 答曰 独逸ノ窩チ斯甸禮幾(オーステンレイキ)魯西亞(ロシア)百爾西亞(ベルシヤ)伯刺西利(ブラジリー)按ルニ古志帝國ト稱スルモノ俄羅斯独逸支那都兒格「マロツカ」日本伯刺西利(ブラジリー)「ヲ云

一 或問 我邦ノ京都如何

一 答曰 「ゲーストレイキ」エルフケイスル

一 或問 江戸八地志家ニテ何ト申上ルヤ

一 答曰 「ケイツル」申上穩当致スベシ

一 ある人問う、全世界の中で、帝国の称号をもつ国はどのよつな国か。
 答えていう、ドイツのオーステンレイキ、ロシア、ペルシャ、およびブラジルである。思うに、古い地誌には、帝国と称する国は、ロシア、ドイツ、シナ、トルコ、マロッカ(マラッカ)、日本をいう。ブラジルの名は疑わしい。

一 ある人問う、我が国の京都(天皇のこと)については、どのよつな国にいつているのか。
 答えていう、「ケーストレイキ」エルフケイズル(神孫家累世の帝・宗教上の世襲の皇帝)とよんでいる。

一 ある人問う、江戸(將軍のこと)を、地理学者はどのよつな国にいつているのか。
 答えていう、「ケイツル(皇帝)とよんでいるが、穩当である。

一 或問 江戸ノ広大ナル「他国ニモ有之哉」
 答曰 我國都「アムステルダム」ノ比スベキニ非ス大抵把理斯ノ大ナリ又
 仏蘭西八我邦ノ二十八倍ノ大ナリ日本ニ乏食ノ多キト火事ノ大ナルコトハ世界第一ト云
 ヘシ

一 或問 人品ハ
 答曰 上官マスマス「フラーフヘン」(好人)也性情ハ大抵都兎格人ニ似タリ都兎格
 ノ人オ識高明ナルモ必勝ヲ謀ル「クハス」學問上達ヲ尊ヒ下学セス此ヲ以テ秀才ナル者ハ
 傲慢ニ流レ平庸なる者ハ怠惰ナリ奇機ヲ見テ模倣セル」
 至テ敏捷ナレドモ性沈実ナラサル故物ヲ創始スル「能ハス」此ヲ吾國ニテ輕能(リユクト
 ホーフト)ト云サレト其敏オハ歐邏巴人ノ及フ所ニアラス

一 ある人問う、江戸のような広大な都市は、他国にもあるであろうか。
 答えていう、我が国の首都「アムステルダム」はとつていおよばない。おおよそ
 フランスのパリスの大きさである。又フランスは我が国の二十八倍の大きさであ
 る。日本は、乏食の多いことと大火事があることでは、世界一である。

一 ある人問う、日本人の国民性はどうか。
 答えていう、上層の人たちは、ますます「フラーフヘン」(立派)である。性質は
 だいたいトルコ人に似ている。トルコ人は、才能学識もあるが、必勝を期すだけの
 ねばり強さに欠けている。学問の上達を尊ぶものの、身近な物事を学ばずとし
 ぬ。そのため才能に抜きんでた人は傲慢に流れ、凡人は怠惰な生活に甘んじてい
 る。めずらしい機械を見て模倣することは至って敏捷であるが、性質が沈着でないた
 めに、新しいものを創造することはできない。このような人物のことを我が国では
 輕能(リユクトホーフト)(頭のからっぽな人)という。しかしながら彼らの敏オは、
 ヨーロッパ人の及ぶところではない。

一 或問 風俗ハ
 答曰 御制度大仕掛ニシテ整束ナキ所アリ譬ハ八匠ト工商貴賤貧富打交
 リテ住居トス他國ニ多ク見ス候

一 或問 二百年來干戈ヲ動カサル「他國ニモ有之候ヤ」
 答曰 カカル安靖ノ國ハ更ニ無之候西洋ハ一日モ寢食安カラス然ルカラニ諸國美政ヲ
 尊ヒ國家ニ憂動スル「又他」ニ異ナリ候近來學芸益盛ニ相成候ニ從ヒ大志雄才ノ者
 出致シ候儘一地球中五分ノ四(按スルニ歐邏巴阿弗利加亞墨利加亞鳥斯太刺利ヲ指)ハ
 歐邏巴ノ政教ヲ受ル如クナリシモ皆憂動憤興ヨリ出テ一失一得共云ウヘキ也此亞細亞諸國ハ
 國富ニ風俗寛裕ナル政治メ易キ方ニモアルヘシ

一 ある人問う、日本人の風俗についてはいかがなものか。
 答えていう、制度は大仕掛けであるが秩序に欠けているところがある。例えば、
 医と工商、貴賤、貧富の者がまじり合つて住んでおり、他国に多く見ること
 はない。

一 ある人問う、我が国は、二百年來泰平がつづいていますが、このよつな国は他国に
 もあるであろうか。
 答えていう、このような泰平な国はほかにはない。西洋では、一日でも寢食を安
 んじてとることは出来ない。そのために諸國は実政重んじ、國家に憂動(獨立を維
 持するために心魂をくだく)している。又他州の國々と異なっている。近年、学芸
 がますます盛んになり、したがつて大志雄才の者が発出(現れる)するよつになつ
 た。世界中の五分の四(ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、アウスタラーを指す)
 が、ヨーロッパの教政(政治的、文化的)を受けるよつになつたのは、みなこれら
 の國々の激烈な生存競争より出てきたものである。であるから、一失一得(平和も
 戦争も)があるのである。このアジア諸國の場合、國が富み、風俗が寛裕である
 が故に治めやすいといえるであらう。

一 或問 國富トハ如何
 答曰 日本ノ土地ト氣候トヲ見ルニ支那我國ナトノ交易ヲ待スシテ用足ルヘキ國ト思
 ハル必竟物産ノ學ブニ疎キ故斯ル不自由ヲ好ム也御世話ヲランニハ諸物勝テ用ヘカラザ
 ラン

一 或問 江戸御城井中ハ如何
 答曰 御城モ當中モ壯大ハ壯大ナリ「ケイツル」ノ御居所ナルヘシ然レト御城ノ敷石
 又石砌御玄関モ鹿相也太広間ノ金壁繪画ハ実ニ見事ナル「ニテ候此殿ハ我國ニテ千疊敷
 ナ申シ伝レハ蘭シニマサル広大ナル御事哉

一 ある人問う、国の豊かさはいかがなものであろうか。
 答えていう、日本の土地と氣候とを考えると、支那や我が国などと交易をしなくとも、十分に用は足りる国であると思われるが、要するに、物産の学問に疎いので不自由な思いを好んでしているといえる。お世話をしようとしても、諸物産を活用して自給できるであろう。

一 ある人問う、江戸城や殿中はいかがなものか。
 答えていう、江戸城や殿中はそれはそれは壮大である。「ケイツル」(將軍)のお住まいにふさわしい所である。しかしながら、城内の敷石や石段、御殿の入り口はお粗末である。大広間の極彩色の障壁画は実に見事である。我が国では、殿中の広さを千疊敷だといひ伝えられているが、聞きしにまさる広大さであるといえる。

一 或問 御老若ノ御邸宅ハ如何
 答曰 大抵大同小異一所御庭ノ気色ヨキ所アリ一所歩障ニ金箋墨山水アリ見事ナリキ何様ニヤ

一 或問 医学ノ致方ハ如何様ニ致シ候ヤ
 答曰 医学ハ人ノ性命ニ関ルルコトユヘ容易ナラス候先ソノ家業并ニ他ノ貴賤ノ者ニヨラス医ヲ学度ト云者アレハ父ヨリ官府ヘ届候得ハ呼出シ問試候テ其器ニ当ルヘク見ヘ候ハ八人学ノ糧ヲ賜リ先解剖学ヲ三年間從事致サセ候

一 ある人問う、老中や若年寄の邸宅はいかがであるか。
 答えていう、大抵は大同小異である。ただ一カ所だけ庭園の景色がすぐれた所があった。また一カ所邸宅の衝立に金箋に墨で山水を描いたみことなものがあつたがどつゆう流派なのだろうか。

一 ある人問う、医学の学び方についてはどのようなやりかたであるか。
 答えていう、医学は、人の生命に関わる事であるので、容易に習得することではない。まずその家業や貴賤のもの(身分のいかん)を問はず、医学を学びたいという者があれば、その父親より官府(役所)へ届け出ると、官府(役所)より呼び出され、口頭試験を受け、その器(能力)を備えていると判定されれば、入学の費用を給付され、まず解剖所に入つて三年間の教育をほどこされる。

コレモ医学ヲ心カケ候童子ハ在宅ノ間ニ解剖ノ図書ヲ熟読致シ候モ有之候テ学習速ニ成候ヘハ其旨学校ヨリ官家ヘ考課ヲ出シ候ヘ八日ヨリ待スシテ昇進致シ候ソレヨリ製薬局ヘ出仕致シ候コレモ三年ニ不満候トモ其功課全ク候ヘ八獄中医者ノ手伝ニ成申候是ハモ八ヤヨホトノ昇進ニ候罪人ハソノ一人ヲ誤チテモ事案不明トナリ勸懲スル処ヲ失ヒ關係

スル処ナレハ平人ヨリモ別ニ心ヲ用ヒテソノ処置ヲナス右ノ医生功課畢リスレハ病院ノ医トナルコレヨリ次第ニ出身シテ軍中船中医侍医ニモ昇リ学校ノ「メーステル」(先生)トナル

この中には幼少のころから医学を志し、在宅で解剖の書を熟読している者もあり、学業が速やかに達成されれば、その旨学校より役所へ成績を提出し、まもなく昇進(卒業)することになる。それから製薬局に出仕し、これも三年に満たなくとも、その功課(学科目)を修得すれば、獄中医者の手助けをすることになる。これはもはやほどの昇進である。罪人は、一人を誤つて死なせても、事実が不明となりあるいは勸善懲悪の趣旨がなりたらず、關係するところが大きいので、一般人よりも特別注意を払つてその処置をする。医学生は、この勤めを終えると病院の医者となる。これより次第に立身して軍中、船中医、侍医に昇進し、学校の「メーステル」(先生)になる。

故ニ先生ト云ハ其数甚少シ大國ニテモ二人カ三人ニ過ス大カタハ病院医ニ至レハ甚ノ昇進ニテ郷学校ノ医師ニモ容易ニナラレルニアラス又一國ノ学校ノ先生トナリテ他邦ニ遊学シ独逸暗厄利亜仲察ノ学校ニ於テ敵手ナキ時ハ初メテ之ヲ大先生(プロドメーヌテル)ト云先生ト云モノノ月俸日本ノ金貨ヲ以テ大率禄千金ニアタル大先生ハソノ其声価ニ因テ差等アリ皆其学業ヲ研究スルト生徒ヲ教育スルト物ヲアツメ書ヲ刻スル等ノ用ニ供ス又医家并ニ学者ノ發明アレハ之ヲ学校ニ於テ歴試ノ上ソノ言驗アレハ其人ヲシテ其「ヲ掌ラシメ其事ヲ書」ニ著シ王家ヨリコレヲ他方ニ頒出シ其全書ノ価中幾分ノ金ヲ其人ニ給ス

故に先生はその数がいたつてすくなく、大國の場合でも二人か三人にすぎない。大方は、病院の医者になればたいへんの昇進といえるので、地方の医学学校の先生になることさえ容易ではない。又一國の学校の先生となり、外国に遊学して、ドイツ、イギリス、フランスの学校において競争相手がないということになれば、これを大先生といふことになる。先生の月俸は、日本の金貨で換算してだいたいのところ千両にあたる。大先生はその名声の程度によつて差等がある。これらはみなその学業の研究、生徒の教育、研究用資材の購入、書物の刊行等につかわれる。又医者や学者が新発見をすれば、これを学校に報告し、これを追験のうえ根拠が実証されれば、その人の手にゆだねる。これを書物にまとめ、王家の手をへて出版し、その価格の一部をその人に与えられる。



他方ノ得ルモノ又速ニ之ヲ試験シ新發明ヲ附シテ速ニ刊布ス故歐羅巴洲中何等ノ「ニヨラス」ノ發明アレハ速ニ二洲ノ物法トナル故ニ士人皆「ノ發明有」ヲ望ム例セシ芋躑（イモムシ）ノ眼（脇）ノ黒点ヲ十八年ノ星霜ヲ積テ漸ク考ヘ得シ類ナリコレ皆其一發明本草書ノ中ニソノ書部數ニ因テ其分ノ禄ヲ分チタマワリ且子孫永世ノ業トナルヲ以テノ故ニ御座候

他方、著書を購入した者は、又速やかに実験をして新発見をつけ加えて著書を著し刊行する。故にヨーロッパ全洲にどのようなことでも一つの発見があれば一洲の惣法（共有財産）となる。ということと西洋人はみな新発見を志す。例えばいもむしの腹の脇の黒点の研究を十八年の歳月を費やして、ようやく完成したという類があ

る。これらはみんなその一つの発見が博物書の中に収められ、その発行部数によって一定の収入が得られ、かつまたこれが子孫代々の事業となる、という理由によるものである。

或問 貴国ニモ町医有之ヤ

答曰 町医アリ左ナクテハ救急ノ間ニ合不申候サレト恣ニ居住ハナラス凡國中療養ノ者医学院ノ吟味ヲ得サレハ療病ナラス候是ハ人命ヲ誤リ天然ニ背キ為ニ一町何人ト申定アル「ニテ空屋ハ猶更人ヲ撰申候

或問 牢獄ニ医ヲ撰ヒ候ト申ハ

答曰 囚獄ハ天下公道ノ場所ナレハ医ヲ撰マサレハ罪人非命ニ死シ候故益相慎ミ殊ニ獄中ハ清氣往来少キ故ニ室氣ニ触レ人体ヲ誤リ候ヲ以テ月六日吏率附添候テ獄苑ヲ歩行サセ飲食ヲ始メ總テ養生ヲ旨トシ四ヶ所ノ役所ニテ審問シテ帝王ヘ申上決断ハ「ケレキレーキ」(僧官ノ邪正ヲ糾候役儒官ノ如キモノナリ)ノ司ル所ニシテ都テ天道ニ背力又様ニ相慎候ヘハマシテ草医ノ誤療ヲ恐レスハ撰ムモノナリ

或問 解体ハ死罪ノ者ヲ用候ヤ

答曰 盜賊ヲモ用ヒ申候解剖学院ニ三月六ヶ日解体スル也貴国ハ如何

或問 貴国にも町医者はいるのか。

答えていつ、町医者はいる。さもなければ救急に間にあわないからである。しかし勝手にどこにでも住むことはゆるされず、およそ国中で療養にたずさわる者は医学院の吟味された者(試験に合格した者)に限られる。これは人命を誤って死なせ自然に背くことを避ける為である。一町ごとに何人と医者を割り当てている。特に牢獄の医者はことさら人選がきびしいといえる。

或問 牢獄付きの医者の人選に厳重なのはどつしてだろつか。

答えていつ、牢獄は公的な施設であるから、適当な医者を撰ばなければ罪人を死なせるようになるので、ことさら慎重になるのである。獄中は清気のとおりが悪く室素を含んだ空気に触れて人体を悪くする者もあり、一月のうち六日、官吏が付き添って獄内の庭を散歩させ、飲食物をはじめ、総て養生を旨としている。四ヶ所の役所で審問して判決を帝王に申告し、判決は「ケレキレーキ」(ケルキレーキ)(聖職者)(僧官で邪正をたす役、日本の儒官のようなもの)が下すことになっている。このように、すべて正義に背かぬように細心の注意を払っている。やぶ医者の誤診によって死ぬことを警戒し、獄医の人選には最前をつくしている。

或問 人体の解剖には、刑死者の死体を用いるのか。

答えていつ、刑死者の死体も用いるが、解剖学院において月六回解剖が行われる。貴国の場合はどつか。

渡辺華山の「自律狂歌草稿」鑑賞(7)

二十五、式朱棒に

(狂歌)

式朱棒にふられた晩八まはし

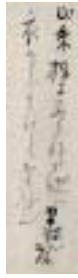
床

衣かたしきひとりかもねん

(狂歌の意)

式朱銀に嫌われた晩はまわし床にさせられて衣の片方を敷いてひとり寂しく寝ることだなあ。

(鑑賞)



昔は、着物を脱がずに、その片方を敷いてまる寝をするとき、恋しい人の夢を見るといふ俗信があつて、この本歌の他にも、例えば、「さむしろに衣かたしきこよひもや我を待つらむ宇治の橋姫」(古今集)とか、「泊瀬風かく吹く三更は何時までか衣片敷き我が独宿む」(万葉集)など多くの和歌に詠まれている。

狂歌は、その「衣かたしきひとりかも寝む」を本歌取りして、狂歌に仕立てている。本歌と狂歌を比較してみると、本歌では主題が秋の夜の独り寝のわびしさを詠んだものになっているのに対して、狂歌は本歌の独り寝を更にうがって見て、式朱棒(式朱銀のこと)を出して上がった遊郭で遊女に振られて、「まはし床」をさせら

(本歌)

後京極摂政前太政大臣

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに

衣かたしきひとりかも寝む

百人一首・九一

(歌意)

蟋蟀が鳴くこの霜の降りた夜の寒いむしろに衣の片方を敷いてひとり寂しく寝ることだなあ。

二十六、夕立に

(狂歌)

夕立に逢ふたかり着の申訳

ぬれにぞぬれし色八かわらし

(狂歌の意)

夕立に逢って濡れてしまった借り着の申訳に「濡れに濡れてしまいました。色は変わらないでしょつから勘弁してください。」と。

(鑑賞)



本歌は、恋人を思い泣く涙が血の涙となって袖の色も変わるほどだと誇張して、自分の嘆きがいかに切実なものであるかを訴えた恋の歌である。

狂歌は、その下の句を本歌取りして、借り着をして出かけた人が夕立に逢って雨に濡れてしまい、その申し訳を言っていることばとして、俗っぽくおかしみを誘ったものである。やや、場面設定がありふれているため、一首の面白さは今ひとつの感があり、惜しまれる。

(本歌)

殷富門院大夫

見せばやな雄鳥のあまの袖だにも

ぬれにぞぬれし色はかはらず

百人一首・九

(歌意)

お見せしたいものですよ。(血の涙であく変わった私の袖を)みちのくの雄鳥の漁師の袖でさえ、濡れに濡れてしまつた、その色は変わらないのに。

二十七、いゝ訳も

(狂歌)

いゝ訳もいゝ尽したる居催促
忍ぶる事のよわりもそ
する

(狂歌の意)

言い訳もいろいろと言いつくしてしまつた居催促に今はもう堪える力も弱つてしまつかもしれない。

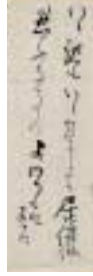
(本歌)

玉のをよたえなばたえねながらへば
忍ぶることの弱りもぞする
式子内親王
百人一首・八九

(歌意)

わが命よ、いつそ絶えるのなら絶えてしまえ。(このまま) 生き長らえているならば、(この恋の切なさを) 堪える力も弱つて、(人目につくことになつて) しまつかもしれない。

(鑑賞)



本歌は、平安女流歌人の第一人者、式子内親王の歌。「玉の緒」は、玉を貫き止める糸のことから転じて、「魂の緒」(命)の意となる。人知れず恋をし、それを押さえられないで吐き捨てるように悲痛な叫びで歌い上げた歌である。

狂歌は、その「忍ぶることの弱りもぞする」を本歌取りして、「居催促」をする相手に言い訳をし尽くして、言い訳の理由がなくなつて困っている人の心境へと主題を転化している。この本歌の「忍ぶ恋」の苦しみ、狂歌になると借金取りを前にした苦しみへと俗化される(こうに庶民の笑いとペーソスの源がある)。

二十八、刀祢川八

(狂歌)

刀祢川八日ましに多き綱引
の身をつくしても鯉渡るへき
百人一首・八八

(狂歌の意)

刀祢川は日ましに綱引きの数が多くなつて、川を渡る鯉も全力を尽くして川を渡らねばならないことだ。

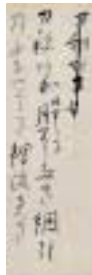
(本歌)

難波江の芦のかりねのひとよゆゑ
みをつくしてや恋ひわたるべき
皇嘉門院別当
百人一首・八八

(歌意)

難波の入り江に生えている芦の刈り取つた一節のようなほんの一夜の仮寝をしたために、この身をささげて、(あの人を) 恋ひ慕ひ続けねばならないのであるつか。

(鑑賞)



本歌は、一夜の旅の宿で結んだはかない契りが、日が経つに連れて次第に本当の恋の思いをかき立てる悩みに変わつていく微妙な女心を詠つたものである。

狂歌は、その下の句の「みをつくしてや恋ひわたるべき」を本歌取りして、「恋」から魚の「鯉」を連想し、「刀祢川」(現在の利根川のこと)「を」を鯉が漁夫の網を巧みに逃れて、必死で渡つていく様子に変えてしまつたところに華山の手柄がある。

「身をつくして」「は」「身を尽くして」と「漣標」(水脈や推進を水深を知らせるために川に目印に立てる杭)の掛詞。「漣標」は、本歌の「難波江」、狂歌の「刀祢川」とはそれぞれ縁語でもある。

二十九、世渡りの

(狂歌)

世渡りの命かけなる杣八木に
きり立のぼる秋の夕ぐれ

(狂歌の意)

命がけで木に登り世渡りをしている杣人は木に登っていて、霧がたちのぼる秋の夕ぐれの景色であることだ。

(本歌)

寂連法師

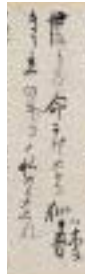
村雨の露もまだひぬまきの葉に
霧たちのぼる秋の夕ぐれ

百人一首・八七

(歌意)

ひとしきり降ったにわか雨の露がまだ乾かないで残っている常磐木のあたりに、霧がたちのぼる秋の夕ぐれの景色であることだ。

(鑑賞)



本歌の秋の夕暮れのもの哀しい情景が、狂歌では樵が木の上で命がけで木を切る風景へと転化している。杣人(きこり)たちの「俺たちは、寂連法師のように悠長に秋の夕暮れの風情なんぞを味わっている暇はねえんだ。生活がかかってんだ。」と木の上から応える言葉さえ返ってきそうに本歌をパロディ化したところにこの狂歌の面白さがある。又、狂歌の「きり立のぼる」には、本歌取りの他に、「切りに立ち登る」の意も掛けているところにも技巧が見られる。

三十、なげんとて

(狂歌)

なげんとてこまの蠅や八取り八せし
かこち顔なる我なみたかな

(本歌)

西行法師

なげけとて月やは物を思はする
かこち顔なるわが涙かな

百人一首・八六

(狂歌の意)

嘆けといってスリは取りはしないのか、いやそんなことはない。(物をすり取られて)嘆いている顔を流れる私の涙であることだよ。

(歌意)

嘆けといって月はもの思いをさせるのであるうか、いやそんなことはない。(それなのに)月が物思いをさせているかのよう(に)かこつけがましく流れる私の涙であることだよ。

(鑑賞)



本歌の作者は西行法師。俗名を佐藤義清といい、北面の武士であったが、左兵衛尉に進んだ後、突然妻子を捨てて出家、諸国を行脚し、建久元年(一一九〇)七十三才で亡くなった。『山家集』の作者。本歌は、その西行法師が出家後、人里離れたところで月を眺めて人恋しさに涙を流し、自分の矛盾した心の内を見つめた味わいの深い歌である。特に、「かこち顔なるわが涙かな」に、法師の人間そのものに対する言いようのない「恋しさ」が感得されるところがこの歌を読む者の心を捉えて放さないところである。

華山の狂歌は、その「かこち顔なるわが涙かな」を本歌取りして、より具体的・庶民的な「スリの被害者の嘆き」としたのである。この狂歌の方も「こまの蠅や八取り八せし」ときわめて理の勝った歌い振りは本歌と同様である。狂歌は、本歌をより身近に具体的に変えることによって、庶民的なペーソスを誘うように工夫されているところが巧みである。それにつけても思われるのは、いつの世も変わらぬ物取りの姿である。科学が発達し、人間についての認識も急速に深まってきていると思われる平成の世に入っても、依然として、このスリや置き引きやひったくりさえあとを断たない。それどころか、ますます計画的で、強引で、粗暴なものが量的にも驚くように増えてつある。華山がこれを見たら、又どんな狂歌にして詠いだすことだろうか。人間とは何と哀しい存在であることが。

研究会員 山田哲夫

田原市博物館 所蔵品から

重要文化財 依田竹谷筆卜商像
(孔門十哲像の内) 糸井榕齋賛
絹本着色

縦一〇二・九cm 横三六・九cm

賛の意味は次のとおりです。

孔子に従って東魯の地に遊学し、孔子の死後、魏の西河で経を説いていた。君子を敬い失わずにいると世の中は平和であり、信義が厚い土地

東魯文学西河名儒 東魯の文学、西河の名儒
敬立沈黙義勝肥腴 敬い立ちて沈黙たり、義勝れて肥腴たり。
篤奉五至深體三無 篤く五至を奉じ、深く三無を體す。
厭洒掃節慎進退換 洒掃の節を厭にして、進退の換を慎む。
吁彼卜子煥乎醇乎 吁彼の卜子、煥乎たり醇乎たり。

文化丙子夏六月下旬
秋田後学系井翼拜讀



は豊饒である。手厚く五至(孔子曰く、志の至る所詩も亦至る、詩の至る所礼も亦至る、樂の至る所哀も亦至る。志・詩・礼・樂・哀を五至と云う。)を奉り、深く三無(礼記に、無声の樂・無体の礼・無限の喪、これを三無と云う。)を身に着けた。日常生活の節度を厳しくし、動作坐臥を手本のように慎ましくした。このように、子夏は、文章が輝かしく人情に厚い人物であった。

卜商は姓を卜、名を商、字を子夏といひます。孔門十哲の一人です。衛の国の人で、孔子より四十四歳ほど年下でした。消極的な人柄で、孔

子の弟子の子張がやり過ぎであるのに対して、子夏は「及ばない」(やり足りない)と評されています(論語・先進編)。孔子に「君子の儒と為れ、小人の儒と為ること無かれ」と教えられたのも、子夏です。孔子の死後は門人を教え、また魏の文侯の師となりました。自分の息子が死んだ時には号泣し、そのため失明してしまいました(史記・仲尼弟子列伝)。

画を描いたのは、依田竹谷。谷文晁の門人で、天保十四年に五十四歳で亡くなりました。天保元年「狂歌三十六歌仙」を描いています。

賛の糸井榕齋は糸井翼とも呼び、江戸で儒学者をしておりました。出羽の秋田出身で字は君鳳、榕齋と号しました。

この作品は、昭和三十年二月二日に重要文化財に指定された渡辺華山関係資料の附として、同三十二年一月九日に追加指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えられました。

田原市博物館学芸員

磯部奈三子

渡辺華山の地方認識

研究員 別所興一

天保二年（一八三一）九月、三十九歳の渡辺華山は、門人高木梧庵（こぎきくわん）ともない、相模国厚木方面に旅行した。主な旅行目的は、華山が臣従していた三宅友信（みやけとものぶ）（前藩主の異母弟、華山の蘭学研究のパトロンでもあった）の生母お銀の探訪である。その五日間の旅行のようすは、『游相日記』という華山のスケッチ入りの紀行文に記録されている。そこには、行く先々の美しい風物や旅先でめぐり逢った人々の言動がいきいきと写生されているだけでなく、日常の窮屈な生活から解放された華山の真情が流露している。

この日記のハイライトは、華山が少年の日に江戸麹町の田原藩邸で胸をときめかしたお銀さまとの再会の場面である。華山は、往年のお銀さまの美しい姿を思い描いていただけに、老いさらばえて一介の農婦に変

身したお銀の姿に当初違和感を覚えたものの、やがてそのまめやかな表情を見て安堵する。他方、お銀は、久しく忘れていた娘時代の情景を思い出し、夢でも見ているような面持ちである。原本ではわずか十丁たらずの記述であるが、二人の明暗に彩られた二十五年の歳月をよみがえら

せる感動的な描写である。次に、お銀との再会を果たした翌々日、華山が駿河屋彦八という侠客（厚木南隣の酒井村の名主を務める）とかわした問答の一端を紹介したい。この旅行は民情視察も兼ねていたので、華山は「政ノ可否ヲ知り、又処置ノ当否ヲ問（ハ）ン」という



立場から、彦八にこの厚木で何か不足に思うことはないかと問いた。彦八は、自分には何も不足はない、今日は今日、明日は明日の風が吹くと思っており、他人のことに興味はないと答えた後、「サレドモ、今二万両無利息十年賦、厚木二カシタラバ、郷二貧者ナク、其富モ又謀ルベカラザル

也。コレダレモ存（ジ）タル事ナガラ、厚木商売ノ盛ナル如（カ）此也」と説明した。その後、「サスレバ、今ノ殿様ニテハ、慈仁ノ心、毫分モ無（レ）之、隙ヲ窺（ウ）ヒ、収斂ヲ行フ。殿様ヲ取力ヘタランコソヨカルベシト思フ也」とつけ加えた。華山は「愕然ト驚キ」、なるほど百姓は耕作に従事すれば領主への義理を果たしたことになるけれども、おまえの発言のときは犬畜生にも劣るものだと叱りつけ、領主の恩恵を示すたとえ話をして説教した。しかし彦八は「黙然」として答えなかつたという。華山はその後、厚木の文人たちの集いで同席した町医者唐沢蘭齋からも、この地を治める烏山藩の不正や失政に対する痛烈な批判を聞かされる。蘭齋は、自分は医者だから有力な旗本屋敷に出入りして、厚木の領主は烏山藩からあなたに交替してほしいと説くのもた易いことだ、などと高言した。華山はここでも、「余聞（キ）テ愕然タリ」と書いている。

当時、華山は日常わがままで見栄坊の藩主・三宅康直の乱行に悩まされ、藩籍離脱して画業に専念しようと考えていたものの、自らの拠つて立つ儒教思想の立場から、彦八の発言を絶対に容認できないものと考えたのであろう。とはいえ、自分にとって不快な発言であつても、それをありのままに記録しているところに、華山の人間的な誠実さとリアリズムの精神が認められる。また、それがその後の華山の人間的成長の原動力になったとも言えよう。

江戸で生まれ育つた華山が、郷国三河田原を訪れたのは四十九年の生涯で五回だけで、田原滞在期間は通算二年一ヶ月ほどであつた。しかし、この短い期間に田原とその周辺の景観や民情をリアルに観察し、「麦は青つしげり、桜はしろく、椿はあかく、竹のむらだちたる上に、蔵王山秀たるさまいとよし」などの美しい文章を残している。天保四年の田原訪問の際に華山は、在国の藩主康直を訪ねて領内統治のあり方につき質

問したところ、藩主はもつぱら江戸城の御奏者番への昇進とお妾のことでしか話題にせず、家来や百姓の生活の苦境などまつたく眼中にないことがわかつた。そこで華山は、地元の防風（セリ科の多年生植物、食用になる）の根のないものを取り出して、次のように意見具申した。

そもそもこの草は、春の陽気を受けて発育する素地を持つていて、かから、殿様ご自身の手で植えつけ、未葉まで生えるよう養育することが大切である。しかし、発育の素地をもつ草でも、根がなくては育つものではない。藩政においても、この根といふものに十分に心をお留めにならないといけない、と説いたうえで、「侍は一家を安くし、諸侯は国を安く遊ばれ候をこそ根といふべければ、まず御国家の事にみこころを費やさせられ候はん。是かならず御権門賄賂御用遊ばせられ候よりもはるかにまして、必ず御登擢あるべきなり」と苦言を呈したところ、藩主も主旨をよく理解したという。ここに

は領民の生活を何よりも重視した華山の政治姿勢がよく示されている。

天保七年の飢饉の時に華山は、藩主に送つた上書の中で、「誠に御領中幾万人のうち、たとへいかに賤しき小民たりとも、一人にても餓死流亡に及び候はば、人君の大罪にて候」とか、「民は国の本、民有りて御一家の立つ儀は申すまでにはこれなく候えば、まず召し上がられ候一粒の御米より何不自由なく御栄耀遊ばれ候事、皆この民の力にて候」と書いている。これも前記の防風を引用した説教の延長線上の提言と言えよう。厚木の旅行からまだ五年しか経っていないのに、領主・領民の主従関係に対する華山の理解が劇的に変化したことがわかる。

田原蟄居後の華山は、かつての藩政改革の同志から今後の藩政の進め方について相談された際に、藩政は人為的な小細工をやめてある程度自然の成り行きに任せ、まわり道のようにでも「養才教化」を基本にした徳政にとり組むことが大切であり、そ

れが田原藩の窮状を打開する正道であると力説した。そして、農村統治の仕事は、この地に五年くらい居住して農村生活を熟知しなければ達成できるものではないと付記している。ここには、久しく江戸定府の生活をおくり、「地方之事」にうといまま国元にさまざまの指令を出してきた自己への反省を読みとることができる。しかし、いつか罪科が赦免されることを信じて、藩政や国政への復帰を準備していた華山の新たな構想は、遂に結実せずに終わったのである。



渡辺華山筆「客参録」
(愛知県指定文化財・個人蔵)より
藤尾山(現田原市加治町)

華山史跡
『参海雑志』にみる
伊良湖のスケッチ

渡辺華山の著作の中に『参海雑志』という紀行文があることは、これまでに『華山会報』だけでなく、いろいろな機会に紹介されてきました。本稿では、参海雑志所載の伊良湖に關係のあるスケッチについて、再度紹介したいと思います。その理由は、参海雑志の旅で華山一行が訪れた伊良湖の集落が、全戸移転して今年がちょうど百年目にあたるからです。

華山は天保四（一八三三）年四月十五日（新曆の六月一日）に田原城下を出発しました。そして、伊良湖に立ち寄ったのは翌四月十六日のことでした。前日、和地の医福寺に宿泊し、同行の鈴木喜六の知人（小久保三郎兵衛）が住む堀切村へ向かうため朝早く起床し朝食をとりました。そして、川尻村、一色村、小塩津村を経て堀切村へ着きました。堀切村では小久保三郎兵衛の後見役である

網元の小久保政右衛門に伴われ常光寺に参っています。その後、先を急ぐということで、堀切村の集落を過ぎたあたりから、「縦横一里の大砂漠」を斜めに横切つて伊良湖の集落を指します。「西に伊良湖の山隔堀の如く連り。南に日出村の岡あり」と記述があるので、現在の伊良湖の集落あたりを通過して、移転前の伊良湖集落を目指しました。

参海雑志には伊良湖に関するスケッチが全部で五枚あります。最初のスケッチは「春世越塚」とタイトルをついた松尾芭蕉の句碑です。「鷹ひとつ見つけてうれし伊良湖崎」と弟子でこの地に流された坪井杜国のことを貞享四（一六八七）年に詠みました。この句碑が旧伊良湖集落の「雄岩」の上にできたのは華山一行がこの地を訪れる四十年前のことでした。

二番目のスケッチは「彦次郎宅」とタイトルをついたもので、「半農半漁にてこのわたりのとめるもの」である彦次郎の家が、二階建ての母屋と平屋建ての長屋で構成されていま

す。庭には、網と収穫物らしきものが天日干ししてあり、人が牛に乗っている様子と、長屋の庇の下から顔を出した牛が描かれています。華山は以前ここへ宿泊しました。

三番目は「伊良湖人」と書かれたスケッチです。牛の背に筵と座布団を敷いて横座りしている人物と、手



「彦次郎宅」



「春世越塚」



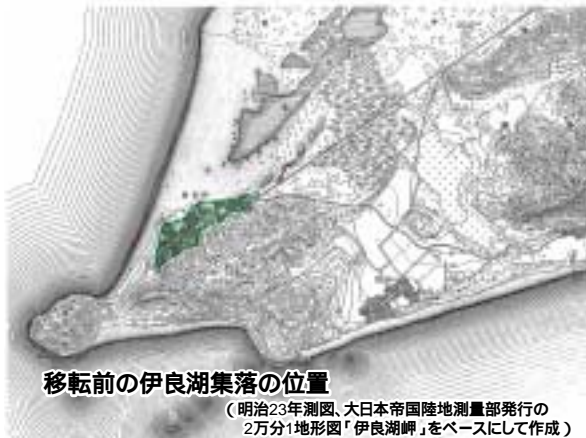
「小山ノ鼻」



伊良湖神社の全景



「伊良湖人」



移転前の伊良湖集落の位置

(明治23年測図、大日本帝国陸地測量部発行の2万分1地形図「伊良湖峠」をベースにして作成)



移転後の伊良湖集落の位置

(大正7年測図、大日本帝国陸地測量部発行の2万5千分1地形図「福江」・「伊良湖峠」をベースにして作成)

綱をとり、鞭で誘導している様子が描かれています。「里人は牛をやしなひて、田圃に事あるも乗て往復するなり。凡和地村わたりよりしては多く牛をやしなひて馬の用に満つ」と交通手段について述べています。

四番目にはタイトルはありませんが、宮山の山腹に展開する伊良湖神社の全景が描かれています。麓に民家らしい建物があり、斜面を登っていくと手水や灯籠が置かれ、門や鳥居があります。そして、最上部に本殿が建っています。

五番目のスケッチは伊良湖の先端部、通称「小山ノ鼻」と激しい波浪を描いたものです。「小山の鼻にこぎ出れば、南は名におえる遠江の灘にして白波の争ふさま白龍のむれおどるがごとく、いとおどろおどろしきありさまなり」と表現しています。

さて、冒頭でも述べたように伊良湖の集落が全戸移転してから、今年(一九〇五)年に「陸軍技術研究所伊良湖試験場(伊良湖射場)」といわれる大砲の実験施設が拡張されたこと

に起因します。射線上にあった伊良湖の集落は、九月十七日から翌明治三十九年三月十五日の約半年の間に全戸移転することになりました。百十四戸あった家々のうち百十二戸が現在地に移転し、二戸は他へ越していったと記録が残っています。

拡張までの経緯は次のようです。明治二十四年三月に陸軍砲兵会議は試験場の候補地として、千葉県銚子付近、愛知県伊良湖、愛知県赤羽根から静岡県浜名湖沿岸、静岡県御前崎沿岸を視察しました。そして、明治三十年五月に陸軍省の担当者が現地調査を行い、土地の大部分を所有する宮内省と伊良湖村村長がそれぞれ協議をして、明治三十二年一月に試験場建設が決定しました。そして、明治三十四年三月に工事が起工し、明治三十八年には大砲の高性能化を図るために試験場が拡張されました。これにより、六千メートル射線が一万メートル射線へと延伸しました。この背景には、日露戦争後の軍備拡張政策があったようです。



現在の伊良湖集落(8月10日撮影)

よって、華山が描いた五枚のスケッチのうち、二番目の「彦次郎宅」と四番目の伊良湖神社の全景は、現在とは全く異なる景観となりました。しかし、換言すると、集落移転前の様子を描いた貴重な資料です。

かつてこの地に滞在した柳田國男はその著作「遊海島記」で「願はしきものは平和なり」と述べています。昭和二十年の終戦で試験場は役目を終えました。今は、伊良湖の人たちがこの地で大過なく幸せに暮らしています。そして、平和を祈念した集落移転百周年のイベントがこの秋から来春にかけて企画されています。

研究会員 林 哲志

財団法人華山会
田原市博物館 から
ご案内

平常展のご案内

十月二十一日～十二月十一日
描かれた四季～文人画を中心に
(特別展示室)
田原の歴史～古写真(企画展示室)
十二月十四日～二月五日
墨絵によるおめでたきもの(特別
展示室)
集まれ動物たち(企画展示室1)

田原の歴史～新発見考古資料展
(企画展示室2)

二月八日～三月十九日

渡辺華山・椿椿山～細密に描く

(特別展示室)

屏風に描く～風景と生物(企画展
示室)

芝村義邦コレクション

相撲錦
絵(企画展示室2)

常設展示室では渡辺華山の生涯を
紹介しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中
心に展示しています。

赤羽根文化会館展示室でも所蔵品
を展示しています。

観覧料

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

毎週月曜日は休館、月曜日が祝日
の場合は翌日、展示替による休館も
あります。

渥美郷土資料館からのご案内

十二月十七日～一月十五日 企画
展「収蔵絵画展」

二月十一日～三月五日 企画展
「ひな祭り展」

入館料無料

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

入会申込は華山会館事務室で受け
付けています。

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報を郵送します。

華山会報 第十五号

平成二七年十月二一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

〒四四一-1142

愛知県田原市田原町巴江二の二

TEL 五三二・二三一・一七

FAX 五三二・二三一・一七

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦 山田哲夫

別所興一 林 哲志

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成一八年四月二一日



田原市指定文化財
渡辺華山筆 春秋山水図(双幅)
展示期間10月21日(金)～12月11日(日)